

平成27年2月

川田壮一郎 学位論文審査要旨

主査 池口正英
副主査 林 一彦
同 村脇義和

主論文

AID, p53 and MLH1 expression and phenotype of early gastric neoplasms and their correlation with the background mucosa

(早期胃腫瘍におけるAID、p53、MLH1蛋白発現および形質発現と背景粘膜との関連)

(著者：川田壮一郎、八島一夫、山本宗平、佐々木修治、武田洋平、林暁洋、松本和也、
河口剛一郎、原田賢一、村脇義和)

平成27年 Oncology Letters 掲載予定

参考論文

1. 当院における早期胃癌に対する内視鏡的切除後の長期経過

(著者：佐々木修治、八島一夫、斧山巧、川田壮一郎、澤田慎太郎、今本龍、林暁洋、
武田洋平、池淵雄一郎、安部良、松本和也、河口剛一郎、原田賢一、村脇義和)

平成25年 消化管の臨床 19巻 65頁～68頁

審 査 結 果 の 要 旨

本研究では、胃癌の発生、進展過程を明らかにすることを目的に、腺腫、M癌、SM癌における癌関連蛋白発現および形質発現と背景粘膜との関連を検討した。その結果、p53発現異常、MLH1発現異常、胃型形質が、M癌およびSM癌において、胃腺腫と比較し高率であり、これらが胃癌発生に関与していると考えられた。AID発現は、SM癌において、p53発現と関連を認めた。*H. pylori*感染による慢性炎症、AID発現異常、p53発現異常の一連の過程が胃癌の粘膜下層への進展に重要な役割を果たしていると考えられた。本論文の内容は、胃癌の発生、進展過程の解明に有用であり、明らかに学術水準を高めたものと認める。